



週)報

2012~2013年度))) R I会長)田)中)作)次)
『奉)仕)を)通)じ)て)平)和)を』)
)))))))))第 2570 地区ガバナー)鈴)木)秀)憲)

国際ロータリー
第 2570 地区

狭山中央ロータリークラブ

〔例会場〕狭山東武サロン〒350-1305) 狭山市入間川 3-6-14)TEL)04-2954-2511
〔事務所〕〒350-1305)狭山市入間川 1 -24-48)TEL)04-2952-2277)FAX)04-2952-2366
<http://www1.s-cat.ne.jp/schuohrc/E> - mail:schuohrc@p1.s-cat.ne.jp
会長)若松泰誼) 会長エレクト)栗原憲司))副会長)山室博美))幹事)稲見)淳

〔第 3 グループ内の例会日〕 狭山(金)、新狭山(月)、入間(木)、入間南(火)、飯能(水)、日高(火)、狭山中央(火)
所沢(火)、新所沢(月)、所沢西(水)、所沢東(木)、所沢中央(月)

第 910 回(8 月 21 日)例会の記録

点 鐘 若松泰誼会長
合 唱 我らの生業
第 2 副 S A A 守屋君、中谷君
卓話講師 落語家 林家正雀様

出席報告

会員数	出席者数	出席率	前回修正
30 名	27 名	89.29%	78.57%

会長の時間

若松会長



オリンピックにおける日本選手団の活躍に興奮した日々が過ぎ、今度は夏の甲子園における球児達の熱戦に一喜一憂している毎日であります。

今年は私の母校も 5 2 年振りの夏 3 回目の甲子園出場場で、私自身も 5 2 年振りにアルプススタンドでの応援(当時高二在学中)で暑い夏が更に熱くなっております。

そこで今回は 3 0 年前の夏、神奈川であったある名監督と二人で高校球児の話をして頂きます。

その高校とは神奈川県の日大藤沢高等学校、球児の一人は荒井直樹君と言ってエースで 4 番バッター、投げない時はレフトで 4 番、もう一人の球児は一学年下のサウスポーで背がノッポの山本投手、荒井の控えのピッチャーです。

監督は日大の黄金時代を築き、引退後藤沢高校を指導された当時 7 0 才だった香椎監督でした。

エースの荒井は「今日は投げるだろう」と思った日は夏場でも長袖、「野手の日は半袖」と決めていた。

当時、神奈川県では「Y 校」こと横浜商業高校が権勢を振っていた。その年の選抜高校野球大会でも全国 4 強入りを果たしている。日大藤沢は春の県大会準々決勝でその横浜商と対決し、4 対 1 4 で大敗している。

荒井が先発で山本が 2 番手で投げ、最後に荒井が投げたけどめった打ちにされた。「このままでは夏に絶対に Y 校に勝てない」と思った荒井は、翌朝から 8 キロのロードワークを自分

に課した。その際、山本にも声を掛け山本も一緒に走る。「先輩が黙々と走っているのについて行くしかなかった。でも、あれからなんですよ、力が付き始めたのは。あの時、荒井さんが走ろうと誘ってくれなかったら今の僕はいませんよ・・・」と山本は言っています。

そして始まった夏の全国高校野球選手権、神奈川県大会の 2 回戦、日大藤沢対寒川高校、両校とも 2 回戦からの登場でそれが夏の初戦。

投打中心だった荒井は重要な初戦のマウンドは当然自分が任されると思って長袖のアンダーシャツを着て用意していたが、老監督香椎が指名したのは一学年下の背番号 10 の山本だった。

夏のオープニング投手に選ばれた山本は完封勝ちを収め、監督の期待に応えた。続く 3 回戦は荒井が先輩の意地を見せつけるかのようにノーヒットノーランを達成、しかし山本も負けじと 4 回戦でも完封劇を披露。それで更に火がついたのか、荒井は 5 回戦で何と 2 試合連続となるノーヒットノーランをマーク。

2 試合連続となるノーヒットノーランは今でも神奈川県大会の記録として残っています。

次戦、準々決勝が最大の山場で相手は宿敵「横浜商」、ピッチャーは 2 年生の山本で好投したものの 2 対 3 で惜敗をします。荒井は結局一本のヒットを打たれないまま最後の夏を終えた。

荒井は高校卒業後、社会人野球「いすゞ自動車」でプレー、最初の 3 年間で投手に見切りをつけ、野手に転向し、計 1 3 年現役を続けた。

一方、山本は荒井が引退した後も毎朝 8 キロのロードレースワークを続け、翌年ドラフト 5 位で中日に入団。プロで現役最年長投手として 2 1 2 勝(現在)を挙げ、今日に至っています。

その人こそあの「山本昌広(ヤマモトマサ)投手」である。

荒井が高校時代「香椎監督はお年でしたからもうノックはやらなかった。話も殆どしない方で卒業するまでに“肩痛くないか”と2度ぐらい話しかけられたぐらいだった」とおっしゃっています。でも監督は全て山本の方が上だと見抜いていたんでしょね。それにしても一人の老監督の眼力が子供の将来を見る。凄いですよね。眼力は年とっても維持出来るんだとしたら、しっかり磨いて若者達の将来を導いてあげたいですね。

幹事報告

稲見幹事

1. 第3 G「フレッシュマン研修セミナー」運営役員出務について
2. 同、「フレッシュマン研修セミナー」開催について
3. 地区補助金プログラム申請締め切りについて
4. 第2 G、ふじみ野RC解散について
5. 受贈会報
入間RC 入間南RC 所沢東RC
6. 回覧物
ハイライトよねやま
米山梅吉記念館・館報
ポリオ撲滅ウェブサイトについて

委員会報告

R情報・雑誌))))))))))) 浜野委員長)
【横組】

6 頁、8 月は会員増強及び拡大月間です。会員増強の秘訣ということで、成功している会の担当の方々が座談会をしております。私たちにも参考になることがあると思いますので、是非読んでみて下さい。

22 頁、「ロータリー希望の風奨学金」ということで、私は知らなかったのですが、ロータリーの皆さんからの寄付金を基に、色々と紆余曲折はありましたが、最終的に月々5 万円を奨学生に差し上げ、これは返却の義務はないそうです。育英会からも3 万~5 万円支払われるそうで、一人につき月10 万円弱のお金がもらえるということです。対象は大学生、専門学生、短大生、大学院生だそうですが、東日本大震災で御両親、もしくは片親を亡くし、学業を断念せざるを得ない人も多くいるということを聞きますが、とても良い取り組みだと思いました。

【縦組】

7 頁、「障害に向かって人生を切り開く」では、木曾 長さんという視覚に障害がある方のお話が載っています。非常に前向きに活動をされていて、甲子園球場に5 万人を集め、障害を持つ人を励ましたいと、三洋電機の後藤精一副社長に談判をしに行き、10 回を超えて受付で撃退されたそうです

が、1 階のトイレで待ち構え直談判し[甲子園球場五万人集会]を実現させたという素晴らしい情熱を持った方です。

15 頁には、新狭山ロータリークラブのバナーの紹介と由来が書いてあります。

17 頁、「友愛の広場」“私は1916年の辰年生まれ”ということで、薬丸さんという96歳の方のお話が書かれております。入間ロータリークラブにも、杉山定太郎さんという101歳の会員の方がいらっしやいまして、今たまたま私は自治会の役員をしておりますが、今度の敬老会にいらっしやれるということで、去年は公演で花束贈呈をさせて頂きましたが、今年もお会いできることを楽しみにしております。先輩方が頑張っているということは、私たちも非常に励みになりますし、これからは希望が持てると思えました。

「外来卓話」・・・・・・・・・・ 落語家 林家正雀様



プロフィール

山梨県大月市出身の落語家である。落語協会所属。本名・井上 茂(いのうえ しげる)。出囃子は『都風流』。趣味は歌舞伎鑑賞。林家彦六最後の弟子であり、師匠彦六の怪談噺、芝居噺の継承者としても知られている。

- 1974年 8代目林家正蔵(後の林家彦六)に入門。前座名は茂蔵。後に繁蔵に改名
- 1978年 二つ目昇進。林家正雀に改名
- 1979年 第8回 NHK新人落語コンクール 最優秀賞
- 1982年 師匠・彦六死去。兄弟子・林家上蔵(現・3代目桂藤兵衛)と共に兄弟子・2代目橘家文蔵一門に移籍
- 1983年 兄弟子・藤兵衛、林家時蔵よりも先に真打昇進
- 1987年 文化庁芸術祭賞
- 1992年 文化庁芸術祭賞
- 1996年 芸術選奨新人賞大衆芸能部門

【男の花道】

東海道は金谷の宿でございます。一軒の旅籠屋がありまして、これその草鞋を脱いだ一人の若者、年は二十三、二十四でございますか、頭を総髪にしておりまして、着ているものはごく粗末な木綿物を着ておりまして、その上から無地の羽織を着て、今煙草をプカプカ飲んでおりましたら、

「女中集はおらんかな、女中集、女中集。」

「へい、ちょっと失礼致します。お客様お呼びになりましたかね。」

「私はな、最前から何度も手をたたいておるが誰も来てはくれんな。」

「へ、そうでしたか。ちっとも気がつかねえで、どうもすみませんでございます。お客様。二階に大勢お泊りになっておりまして、二階が忙しいものでこちらに手が回らなかった、どうもすみませんでございますな。二階にお泊りのお客様、大阪からお下りのお役者様でね、中村歌右衛門様御一行でございますね、私は歌右衛門様は錦絵では見たことがありますけど、本場ものを見るのは今日が初めてで、今日は楽しみでね。それからとおきのお茶を入れて持っていっただよ。歌右衛門様お茶でございますって差し出したら、ニコニコって笑っておくんなすって、いい男なんていうもんじゃないね。水が垂れるって、あれを言うんだね。あんまり嬉しいからまたお茶を持って行って、また笑ってもらって、またお茶を持って満十六度。」

「なんだなんだ。二階には三十六度？私の所へは誰も来てはくれないかな。二階は役者？私は医者であるけれど、扱いがたいそう違うのであるな。」

「お客様医者かね？とても見えないね。医者と言ってもどうせお前様タケノコだんべいね。」

「なんだ？そのタケノコというのは。私はやぶ医者というのは聞いたことがあるが、なんだそのタケノコというのは。」

「タケノコはこれからやぶに近づくんだよ。」

「やぶに近づいてタケノコ？これは酷いことを申したな。私は姉さんに一本取られてしまったぞ。一本というとお銚子を一本、それからだいぶ空腹であるから膳の支度を急いでもらいたいな。頼んだぞ。」

「承知しました。」

これから女中さんがお膳を運んで参りまして、ちびちび飲んで食事を済ませる。

「私はな、湯には入らんぞ。すぐに床を延べてすぐに休もう。」

この人はぐうっと寝込んで、どのくらい時がたったのでしょうか

「あのお客様起きて下さい、お客様、お客様。」

「なんだ、なんだ、火事か。」

「いや、火事ではないですよ。えらいことが起きました。二階にお泊りの歌右衛門様がえらい苦しみようで、お医者がないかってお弟子さんが騒いでいるんだよ。この金谷はお医者がないんだ

よ。柿川まで迎えに行かなければならないけど片道八里でとても間に合わないでね。そしたらお弟子さんが言うには、やぶでも何でも良いからいいかって言われて。私は答えたよ。やぶはいない、タケノコならいるってね。素人よりまじだから診てもらいたいって、そう言ってるんだよ。歌右衛門さん診ておくんなさい。」

「なんだ、歌右衛門殿が。今二階で唸っているのはそうか。これは事によると命に係わる一大事であるな。じゃあ私がさっそく診てしんぜよう。案内をいたせ。」

「こちらでございます。」

これから二階へトントントンと駆け上がって、奥の一間にやってくると、歌右衛門がえらい苦しんでございます。この歌右衛門という方、三代目の歌右衛門。先年亡くなりましたのは六代目でございます。三代目歌右衛門、この方初代歌右衛門の実子でございます。初代の生まれが加賀の金沢、従って屋号が加賀屋と申します。三代目の歌右衛門という方、当時名優でございまして、大阪一の俳優、あまりに名優の誉れが高いので、江戸の興行主が目をつけまして、江戸に下って来てもらいたいという、その途中の出来事でございます。

「歌右衛門殿、私は半井源太郎と申す。眼科の医師でござるぞ。五年の間、長崎に修行に参りました。その戻り道、今診察をさせてもらいましたが、この目は風眼という大病。事によると目が潰れるかもしれないな。」

「先生、今日が潰れましては折角大阪から下って参りました苦勞が水の泡。先生のお力を持ちまして、この病をどうか治して下さいませ。」

「私も治して進ぜたいがな、しかしこの療治をするためには荒い療治をしなければなりません、覚悟はできておりますか？」

「例えどのような荒い療治でも、再び舞台に立てますことならば覚悟致しますから、先生のお力にすぎります。どうか病を治して下さいませ。」

「分かりました。では療治にかかりましょう。」

と言ったのですが、当時は麻醉というものがありませんが、これは診る方も、診られる方もえらい苦しみようで、三日寝ずに療治をしまして四日目、朝の光がさっと障子から差し込んで参りまして、庭では小鳥がさえずっております。今手当の布を取りまして、

「歌右衛門殿、ゆっくりと目を開けなさい。もし御目が開眼を致さぬ時には半井源太郎、今日限り医者を辞めましょう。見えますかな、どうかな。」

「先生、見えましてござりまする、良く見えましてござりまする。先生ありがとう存じました。」

「よかった。私も嬉しい。」

「親方、弟子の玉八ですがね、私の顔が見えますか？」

「おお玉八、皆にも苦勞かけました。良く見えます。先生、ありがとう存じました。」

「しかしな、まだ養生しなくてはなりませんぞ。」

今宿を立てはなりません。五、六日逗留を。」

「先生のおっしゃる通りに致します。」

尚もしばらく逗留ということになりまして、宿の方では先生、先生と偉いもてなし用でございました。

「先生、家に泊まって下さった歌右衛門様の病を治して下さいありがとうございます。この女中の花でございますが先生に無礼なことを申したそうで、どうぞご勘弁を願います。花、先生に謝りなさい。」

「先生様、歌右衛門様を治して下さいまして、ありがとうございます。そんなご名医とも知らないで、私はうっかりタケノコなんてことを申しまして、どうもすみません。これからはそんなことを言いませんで、“御タケノコ”・・・」

「なにを言う。」

尚も六日ばかり逗留をして、七日目の朝、宿の一同に見送られまして一行が江戸に向かうのでございますが、何と言いましても当時旅で東海道の難所が箱根山、これはきつかったようでございます。この箱根山には色々な話が残っておりますが、八代将軍の吉宗という方、この方はたいそう動物を好んだそうです。あるとき象を見たいとおっしゃり、象は日本におりませんから、将軍の命令ですので使者がインドに発ちました。やっと話がまとまり、インドから象が渡ってきましたが、当時開港しておりました長崎に船が着き、象が下って参りました。もちろん象使いの名人が手綱を握ってこれから江戸へ向かいますが、道中とても長く、象使いが上手くあやしながら歩いて参りました。箱根山、ここへ来ると象の歩みがぴたっと止まってしまいまして、さあ困りました。象使いがなだめてもすかしても歩かない、しかし将軍が待っているわけですから、ここで象が倒れてしまったら切腹物です。なんとかしなければいけないとある人が考えました。こういう元気をなくした象に日本酒を飲ませたらどうだとうということ、一番良い日本酒を飲ませようと、お米の良いところを削った一番おいしい日本酒を持っていく、一樽と申しますから、一斗（一升の十倍）の四倍です。これを象の目の前に置き、すると象が長い花を樽の中に入れ、すっかり飲んでしまい、元気になりました。そして箱根を無事に越したということですが、やはり象には日本酒、キリンはビールでございます。

一行が江戸に入ってきました。江戸は馬喰町、これは日本橋のすぐ側でございます。旅籠屋が並んでおりまして、その一軒に一行は草鞋を脱ぎました。その一間、

「先生、この度はありがとうございます。お陰様で中村座、檜舞台を踏むことができます。先生のおかげでございます。これは指些少でございますが、百目の金子、療治代、どうぞ収めて頂いて、ありがとうございます。」

「歌右衛門殿、これは何でござる？私はこれを頂

戴しようと思って療治をしたわけではござらん。偶々どうしこうして、御身の芸を惜しんで意志を込めて療治をさせてもらいました。それよりも金谷の市から江戸に入るまでの贈与をすべて持ってもらった。もうそれで十分。これはお返しを致しますよう。」

「恐れ入ります。金銭に潔白なる先生に対しまして、金子を持って礼をしようとした歌右衛門の誤り、平にご容赦願います。ですが先生、このご恩は歌右衛門、終生忘れるものではござりません。この後もし歌右衛門の身に適うことがありましたらば、お手紙を一本下さりませ。水火の中をいわず、何処へなりと馳せ参じますのでござります。どうかお手紙を下さりませ。お忘れになりませんように。」

「嬉しいことを言ってくれたな。私はそれで疲れが取れました。ではこれで御暇いたそう。どうか身体をいたわって。ではごめん。」

そして半井が出ていきまして、病が癒えました歌右衛門でございます。江戸の御目見得狂言・ひらがな盛衰記というお芝居を出しました。これは歌右衛門の十八番でございます。源太感動の源太、逆櫓の末右衛門というこの二役が大当たりをとりました。

当時江戸で一番人気のあった俳優が三代目の坂東三津五郎という、今の三津五郎が十代目でございますから、かなり前の三津五郎でして、この方は踊りの名手でございます。だいたい坂東三津五郎を名乗る方、皆踊りの名人です。今の三津五郎も踊りの名手でございますがね。

三代目がたいそう踊りの名人でございます。当時流行っておりました、変化舞踊、これは役者が色々な役に扮して踊りぬくのでございますが、歌右衛門という方もやはり踊りの名人でございますから、二人が踊りで芸を競い合っておりまして、3年経った今では歌右衛門の方が人気が上がって参りました。

こちら半井源太郎、今では品川のいろは長屋という、貧乏人が暮らしておりますこの長屋の一角に看板を出しました開業医でございますが、この半井源太郎というお方、医は仁知と心得ておりまして、相変わらず貧乏暮らしをしております、

「おばあさん、おばあさん。」

「先生どうなさいました？」

「私は今日向島の料亭に参りますぞ。」

「さようでございますか。まあたいそうなご出世で。」

「いや、別に出世をしたわけではござらんがな、行って参ります。留守をお願いします。」

「さようですか。まあ先生。先生のお好きな芋の煮っ転がしをこしらえて後で届けようと思っておりますが、ではそれは召し上がりませぬね。」

「いや私はな、おばあさん、料理屋の料理というのは口に合わないでね、その芋の煮っ転がしが楽しみであるな。では私は急いで帰ってくるので留

守をお願いします。」

「いってらっしゃいませ。」

「いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい。」...

大勢に送られてやって参りました。向島の植半という、当時一という料亭でございまして、これに來たということには訳があります。

当時老中水野出羽守、この人の御側御用人・土方縫殿助に招かれました医師の宴席でございまして、医者が四十、五十人入り、芸者・太鼓持ちが入りまして、その座敷の陽気なことといったらございません。

「いやいや、もう芸者の踊りは飽きた。芸者の踊りはよいぞ。それに控える。ユウサイ・ミョウアン、なんだ二人とも酒ばかりのんでいないか。芸者ばかりに踊らせて。兩名とも立ってなんぞ踊れ。」

「さようでございますか。では殿様のご命令でございますから躍らせてもらいますが、我々は姉さん方によって“かっぱれ”なる踊りを躍らせて頂きましょう。今巷でたいそう流行っておりますからな。この“かっぱれ”を踊るにつきましては、この着物裾は端折りまして、手拭いでもって向こう鉢巻を致しまして、これで“かっぱれ”を躍らせて頂きますので、では姉さん方お願い致します。」

「よお～いとな、あよいよい、沖の暗いのに...」

「あの兩名は“かっぱれ”は見事であるぞ。しかし脈を取らせてはならんぞ、脈をとらせると怖いからな。“かっぱれ”は見事である。皆の者、兩名のために手を叩け。それに控える半井、なんだ貴様、最前から下ばかり向いておるではないか。芸者が踊っても見ようとせん。今兩名が“かっぱれ”を踊った。“かっぱれ”を踊っても手も叩かんでないか。貴様何か、この座敷に退屈を致しておるのか」

「決して左様なことはござりませぬ。」

「ではなぜ踊りを見ぬ。下ばかり向いておって。わかった。貴様何であるな。人の踊りを見ても面白くない。自分で踊りたいと思っておるな。」

「いえ、そのような。」

「そうに違いない。半井、立って踊れ、早く踊れ。」

「平にご勘弁を願います。手前は歌も踊りも不得手。どうかご勘弁を願います。」

「私の命令である。立って踊れ。」

「どうかご勘弁を願います。」

「半井殿、半井殿、御前様の命令である。立って踊りなさい。確かあなた、五年の間長崎に参りましたな。長崎という所、唐人踊りというたいそう面白い踊りが流行っていると聞きました。立って踊りなさい。」

「拙者長崎に眼科の修行に参ったもの。踊りの稽古に行ったわけではござらん。」

「まあそこをなんとか。」

「では半井、世の命令に背くのか。」

「いえ、決して左様なことではござりませんが、手前最前も申しました通り、歌も踊りも不得手。手前に変わってどうか然るべきものに踊って頂きとうございます。」

「なんだその然るべきものというのは、この座敷にいる芸者も太鼓持ちも、世の命がなくては誰ひとり踊るものはおらん。なんだその然るべき踊り手とは。今然るべき踊り手と申すとな、変化舞踊で腕を競い合っている、中村歌右衛門か坂東三津五郎を置いて他にはないはずであろう。」

「中村歌右衛門、懐かしい名前を伺いました。」

「なんだ歌右衛門が懐かしいと言うのは。貴様何か、歌右衛門を存じおるのか。」

「いささか存知おりますれば。」

「なんだ、いささか存じおりますればと言うのは。貴様わかった、ではその方にかわって歌右衛門を座敷に呼んで躍らせよう、そう言ったではないか。面白い、歌右衛門を座敷に呼んで見せろ。あの歌右衛門はな、今江戸でたいそうな人気であるぞ。貴様のような貧乏医師が招いて来るはずがなからう。」

「いや、歌右衛門ならばこれへ参るでございますよう。」

「来るか。」

「手紙一本でこれへ参りましょう。」

「何を申しておる。拙者が何回呼んでも來たことが無い歌右衛門であるぞ。来るわけではない。まして確か今中村座は舞台の最中である。その歌右衛門が来るはずはなからう。」

「いや決して何の中でも手紙一本でこれへ参るでございますよう。」

「何、手紙一本でこれへ参る？半井、公言を吐きおったな。貴様の招きで来るわけではない。もし來たならば石が流るわ。木の葉が沈むわ。呼んで見せろ、呼んで見せろ。」

「きつと参るでござりましょう。」

「もし來なかつたらなんと致す。」

「きつと参ります。もし歌右衛門、一時のうちに参りませんければ、切腹致します。」

「何、腹を切るか。誠か。」

「男子に二言はございません。」

「よし、面白い。呼んで見せろ、早く呼べ。」

「半井殿、半井殿、謝りなさい。」

「心配ご無用。あのそこにある筆と紙を貸して下さい。」

これから半井源太郎、筆を執ってさらさらとしたため、これ命にかわっての手紙でございます。これが中村座に届きまして、今中村座、これから歌右衛門の金の狂言が18番、本朝廿四孝・八重垣姫、今化粧をしておりますと、

「親方、半井先生から火急の手紙が届きました。」

「半井先生、懐かしい名前を伺いました。手紙をこちらに貸して下さい。」

歌右衛門手紙を広げて読んでおりますうちに、さっと顔色が変わってきた。

「親方、先生どうかなすったのですか。」

「御身、一時の内御来が無き時には、男子の面目なもって、切腹な仕り候。先生の大難。すぐに籠を呼んでおくれ。向島に参りましょう。」

「親方待ってください。向島に参るって、そうはいきません。舞台がまだ一幕残っています。行くわけにはいきません。」

「今行かなければ大恩人を死なせてしまいます。男と男の約束を果たすことができません。どうか籠を呼んで。」

「そうはいきませんよ、親方。先生を助けたい気持ちはわかりますが、お客が承知をしませんよ。舞台に穴を空けるなんてことは。座元の金方が許しませんよ。」

「そうだ、座元の金方を呼んできておくれ。南無観世音菩薩、南無観世音菩薩、この危難を救い候へ。」

「加賀屋、今弟子から聞いたよ。お前さんなんだって、舞台に穴を空けどこかへ行くって。冗談はいけない、そんな真似はさせないよ。いいかい、この小屋一杯入っているんだよ。お前さんが舞台に穴を空けると血の雨が降るんだよ。そんな真似はさせない。第一、考えてごらんなさい、役者は親の死に目にも会えないんだ。そんな真似はさせない。」

「座元金方、親の死に目にも会えないのは知ってなつた役者道にございますが、今参りませんければ大恩人を死なせてしまいます。男と男の約束を果たすことができません。どうか一時のご猶予を願います。一時ありますれば戻って参ります。」

「駄目だね。そんな真似はさせないんだよ。いいかい、こちらは櫓を背負っているんだ。そんな真似はさせない。」

「さようですか。では今日限り役者を辞めましょう。国に帰りましょう。」

「ちょっと待ってくれ、辞めたら困る。」

「ですから一時のご猶予を願います。役者道に反しましても、人間の道に反することはできません。どうか一時のご猶予を願います。」

「そうかい、それでは勝手にしな。だがね、こつちが許したって客が許すかわからないんだよ。」

「いや江戸の御客様、情には厚く、また義理には厚いと聞いております。これから舞台上がってお客様に御すがり申すつもりでございます。」

「客に頼もうと言うのか。勝手にしな。」

「ありがとうございます。玉八、口上の支度だ。」

これからすっかり歌右衛門、口上の支度を致しまして、二丁でもって幕が開きますと、浅い幕がつつてありまして、その前に口上姿の歌右衛門がぴたりと平伏を致しまして、

「一座、高こうはござりますれど口上もって申し上げたてまつります。さて皆様、三年前より江戸に参りまして今日まで庇護の御贔屓、お引き立

て、御礼の申し上げようともござりません。今日廿四孝の幕前におきまして、江戸の皆様は御すがり申したきことがござります。と申しますのは、三年前、江戸に参ります道柄、東海道は金谷の宿でございました。手前風眼という大病、と同宿の半井源太郎というお方に病を治して頂きました。その先生のお蔭で今日こうして皆様は御目通りが叶ったのでございます。その大恩なる先生が、今向島の植半におきまして、歌右衛門、一時の内に参りませんければ、切腹をなさるといふ身の大難でござります。今参りませんければ大恩人を死なせてしまいます。その折、お手紙を一本下さい、お手紙を下すつたら水火の中を厭わず、何処へなりとも馳せ参じますと男と男の約束を致しました。今参りませんければ男の約束を果たすことができません。江戸の御客様、誠に義には強く、情にも厚いということを知っております。この歌右衛門に一時のご猶予を願います。一時ありますれば向島に参りまして事が済み次第戻って参りまして、廿四孝の幕を開けますれば、この歌右衛門に皆様一時のご猶予を、お力添えを、隅から隅まで乞い願ひ上げ奉ります。」

「歌右衛門、行ってきな。待ってやるよ。朝まで待ってる。行ってきな。」

「そうだよ、当たり前だよ。俺提灯屋。提灯どっさり持ってくる。」

「おれ蠟燭持ってくる。」

「行ってやれ、行ってやれ。」

「ありがとう存じます。」

行ってやれ、行ってやれという客の声、これを背中に受けました歌右衛門が籠に乗りまして、向島を目指しました。

「半井、約束の刻限、一時経ったではないか。歌右衛門来ぬではないか。なんと致す。」

「歌右衛門参りませんでした。切腹仕ります。」

「腹を切るか。」

「男子に二言はござりません。お座を汚します。ご容赦願います。」

と半井源太郎、片腹脱ぎになりまして、脇差をすつと抜き、これを手拭いに包み、今左の脇腹、突っ込もうという寸前に、廊下をバタバタと駆けて参りまして、すつと襖が開き、

「歌右衛門にござります。先生、間に合いましてござりまするか？」

「歌右衛門殿か、来て下すつた。」

「間に合いました。間に合った。宜しゅうございました。御前様、歌右衛門、先生に代りここで舞わさせていただきます。」

立ち上がった歌右衛門が芸者衆の弾く三味線に合わせて踊り始めた。一同の者、ポカンとして、踊りが済むとやんやの喝采でござります。

「御前様、また改めてお詫びに参上つかまつります。先生、まだ小屋で一幕残っております。一緒に小屋に来てください。」

「参りましょう。」

籠が二丁になって戻って参りました中村座、正面をみると提灯が五十、六十丁かけてありまして、その明るいこと、昼間かと思う位。舞台はと見ると、百目蠟燭、これが五十、六十丁並んでおります。何という情のある江戸の御客様、すぐに支度を致しました歌右衛門、幕が開きました。本朝廿四孝、奥庭でございます。その時の歌右衛門、まるで乗り移った様で

「おおそれよ 思い出したり 湖に氷はりつむれば 渡り初めする神の狐 その足跡をしるべにて ころやすも 行き交う人馬 狐渡らぬその先に 渡れば水に溺るとは 人の知ったる諏訪の湖 有り難や 忝や 兜を持って押し頂き 飛ぶがごとく」

花道を引っ込むとやんやの喝采でございます。この評判が上がり、歌右衛門ますます人気が上がってまいりました。一方こちら半井源太郎、今まで暇を困っておりましたが、この噂で江戸中の患者がやって参りまして。朝起きると行列ができておりました。後に名前を改め半井法眼となりまして、日本一の名医となったという、男と男の約束、名医と名優の一席。

ちょうどお時間でございます。



- 若松君 林家正雀師匠、今日はよろしくお願い致します。
- 稲見君 今日は高校時代の同窓の林家正雀師匠に話して貰います。皆様、ご期待下さい。
- 江原君 本日外来卓話の講師を務めて頂きます落語家の林家正雀様、先日NHKでの芸能百花繚乱「三遊亭圓朝の世界」を観させて頂きました。芝居の面白さを新たに知りました。本日の卓話楽しみにしております。何卒よろしくお願い致します。
- 寶積君 林家正雀師匠、本日の話、楽しみにしています。
- 小島君 林家正雀様、本日はようこそお出で下さいました。お話楽しみにしておりました。
- 栗原(憲)君 落語家、林家正雀様ようこそお出で下さいました。落語楽しみにしております。
- 中谷君 落語家、林家正雀師匠、本日はようこそお出で頂きましてありがとうございます。卓話よろしくお願い致します。
- 奥富君 林家正雀様、今日のお話よろしく申し上げます。
- 山室君 林家正雀様、ようこそいらっしゃいました。卓話楽しみにしています。
- 吉川君 林家正雀様、今日の日を楽しみにしておりました。

次の例会

9月4日(火) 12:30~13:30

健康体操 高岸陽子様

第2副SAA 沼崎君 小幡君

